

大学生における非表出性攻撃¹と抑うつ²の関係について

－ 社会的情報処理モデルの立場から －

川端 壮康*・大渕 健一**

The relation on inexpressive aggression and depression in college students

－ from the standpoint of the social information-processing model －

Takeyasu Kawabata · Ken-Ichi Ohbuchi

本研究では、感情変数を加えた改訂版社会的情報処理モデルの立場から、非表出性攻撃と抑うつ²の関係について検討した。大学生206名の協力者に、3つの対人葛藤場面からなる場面を読ませ、その際の、相手の敵意の帰属、攻撃行動という認知変数、怒り、感情調節（認知的調節、積極的気晴らし、消極的気晴らし）という感情変数、および抑うつ得点（抑うつ尺度、不安尺度、落ち込み尺度）を評定させた。その結果、積極的気晴らし、認知的調節、攻撃行動、抑うつに男女差が見られたので、男女別に分析したところ、①女性では怒りが抑うつを高めるが、男性ではそうではないこと、②男女ともに、一般には適応的な感情調節とされる認知的調節が抑うつを高めることが示された。ここから、攻撃行動への心理教育的介入は、抑うつという新たな問題を引き起こす危険性があることを考慮したうえでなされるべきであることが示された。

Key words：非表出性攻撃、抑うつ、社会的情報処理モデル、大学生

1 問題点とその背景

1-1 対人葛藤と解決方略としての攻撃行動

人間は国的（ポリス）的動物であるというアリストテレスの言葉を待つまでもなく、人は一人では生きられぬ存在である。幼少時の家庭での養育、学校教育、社会人としての生活や自らの家庭生活等、人は常に他者と関わる中で生きていかざるを得ない。

こうした人間である以上避けることができない人と人とのかかわりの中で、“個人の行動、感情、願望、期待が他者によって妨害された状態”（大渕、1996）（p.115）と定義される対人葛藤も経験されることになる。こうした対人葛藤が常にうまく解決されれば問題はないが、現実場面においては、解決が不可能な葛藤に直面したり、ストレスフルな解決方略を用いざるを得ない場合もまれではない（橋本、1995）。

人が対人葛藤場面に直面した際にとる解決方略の一つに、攻撃行動がある。この攻撃行動には、示唆、説得、哀願、交換取引等の平和的な手段に比べると、強い意志と勇気が必要である、

2014年9月10日受理

* 尚絅学院大学 准教授

** 東北大学大学院文学研究科 教授

エネルギーが要求される、相手が反発すれば葛藤がエスカレートする危険がある等のデメリットがある（大淵、2011）。それでも、ある状況下では、人はこうした攻撃行動を対人葛藤の解決方略として選択するが、大淵（2011、2000）によれば、人が葛藤場面において回避・防衛、影響・強制、制裁・報復、社会的アイデンティティの4種の目標を持つ場合、攻撃的な方略選択が促進されるという。また、感情過程が攻撃行動の生起に重要な役割を果たしていることを示す研究もあり（Eisenberg et al, 1996）、そうした感情の中でも、特に怒りが攻撃行動を促進することが明らかにされてきた。例えば、短気な人が攻撃的行動をとりやすいこと（Bettencourt, Talley, Benjamin, & Valentine, 2006）、怒りが殺人（Berkowitz, 1993）、児童虐待（Nomellini & Katz, 1983）、DV（Barbour, Eckhardt, Davison, & Kassinove, 1998）を促進することが報告されている。

1-2 非表出性攻撃

攻撃行動の分類にはこれまで様々な方法が提唱されてきたが、その一つとして、攻撃行動を大きく反動的攻撃及び道具的攻撃に分け（Crick & Dodge, 1996; Dodge & Coie, 1987）、さらに反動的攻撃を表出性攻撃と非表出性攻撃に分ける分類法が山崎ら（坂井・山崎、2003、2004a、2004b）によって提唱されている。坂井・山崎（2004a）によれば、これらの分類は以下のとおりである。まず、道具的攻撃は、自らの目的を達成するために攻撃を使う行動であり、必ずしも怒りやフラストレーションを含む必要はない。反動的攻撃は、挑発やフラストレーションに反応して生じ、怒り反応を伴う。この怒りに対する反応が表に現れると表出性攻撃となり、直接表に現れない怒りが、他者一般に対するシニシズムや悪意帰属となるのが非表出性攻撃である。非表出性攻撃とは、腹が立つことがあっても、行動した後のことを考えたり、怒ること自体が良くないことだという思いに基づいて、怒りを攻撃的言動として表出しないものの、相手に対する敵意や皮肉な気持ちを抱くようになることといえる。

こうした敵意などの反動的な非表出性攻撃の形成過程について、Houston and Vavak (1991) は、親からの直接的な養育態度の重要性を示唆している。また、坂井・山崎（2004a）は、非表出性攻撃の獲得過程では、母親を含む第1養育者とのやりとりが最初の機会となり、養育者との1対1のやりとりの中で反動的な表出性攻撃に対するネガティブな反応を受け続けることにより、この攻撃傾向が学習されてくる可能性を指摘している。

この非表出性攻撃が生み出されるメカニズムについて、坂井・山崎（2004a）は、攻撃行動の社会的情報処理モデル（例えば、Crick & Dodge, 1996）の立場から、小学生を対象とした質問紙調査を実施している。ここで、この情報処理のモデルは、社会的刺激に対する反応として攻撃行動の遂行に到る連続した5段階の認知的ステップを仮定するものである（Dodge, 2010）。それは、社会的状況に対して、個人が膨大な刺激からいくつかの手がかりに対して選択的に注意を向ける「刺激注意・感受」段階、他者の意図に関する解釈を含む、他者や状況に関する心的表象を形成する「表象形成」ないし「解釈」段階、心的表象に伴って情動的反応が生じ、また、葛藤をどのように解決するべきかという目標の具体化が行われる「目標選択」段階、反応選択肢を思い浮かべる「反応生成」段階、生成された反応についての評価と意思決定がなされる「反応評価・決定」段階で、これらを経て攻撃行動が実行される。さらに近年は、この認知的モデルである社会的情報処理モデルに、感情過程を統合する試みが見られるようになっている（Graham, Hudley & Williams, 1992; Lemerise & Arsenio, 2000; Lochman & Wells,

2002)。こうした立場から、de Castro (2010) は、社会的葛藤場面において、制御されない怒りが攻撃反応を促進する一方、感情調節がこれを抑制することを見いだした。この結果に基づいて彼らは、Dodge の SIP モデルに怒り感情と適応的感情調節 (adaptive emotion regulation) という感情変数を加えた改訂版 SIP モデルを提起した。なお、ここで感情調節とは、感情体験及びその表出を制御し、修正し、管理する試みである (Cole, Martin, & Dennis, 2004)。

坂井・山崎 (2004a) は、介入効果が期待できるという理由から、従来の社会的情報処理モデルの「反応評価・決定」段階に着目し、その歪みと攻撃性のタイプとの関係を検討している。その結果、予想に反し、非表出性攻撃傾向が高かった児童について、社会的情報処理の歪みが見られなかったことを報告している。つまり、非表出性攻撃においては、攻撃行動の決定過程には、その行動が良い行動であるとするかという反応評価、及びその行動をとることによって、自分がいい気分になるかといった結果予期は影響しないことが示された。

非表出性攻撃に反応評価・結果予期が影響しないという坂井・山崎 (2004a) の結果を、社会的情報処理モデルに怒りと感情調節という感情変数を組み込んだ de Castro (2005) の改訂版社会的情報処理モデルの立場から考察すれば、非表出性攻撃行動とは攻撃行動を促進する変数である怒りが強くありながら、感情調節によって攻撃行動が抑制された状態と定義することができる。

1-3 非表出性攻撃と感情調節と抑うつ

この非表出性攻撃と抑うつの間には関連があることが繰り返し指摘されている。例えば、坂井・山崎 (2003) では、児童において、非表出性攻撃と抑うつとの関連が高いことが示された。勝間・山崎 (2007) では、非表出性攻撃傾向が高い児童は、攻撃傾向が低い児童よりも高いネガティブ感情を示している。また、大学生においても、ストレス、怒り、怒りをコントロールすることなどが抑うつを高めることが報告されている (越智、金澤、坂野、2012)。さらに、敵意や短気が抑うつを高める危険因子であると指摘 (上野・丹野・石垣、2009) や、怒りに対するコーピングスタイルには関係なく、敵意の高さが抑うつに影響を与えているという知見も得られている (山内、坂野、2006)。

ここで、非表出性攻撃の定義に基づき、表出されなかった怒りが転化されたものと敵意を捉えれば、改訂版社会的情報処理モデルにおける、怒りの強さと、感情調節を用いる傾向が高いことが、ともに抑うつを促進することが予想される。一般に、感情調節が高いことは攻撃行動抑制要因として適応上肯定的に評価されるが、こうした立場に立てば、抑うつという別の形の不適応を引き起こす原因となる可能性が指摘されるであろう。

現在、抑うつが大きな社会問題となっており、大学生においても同様である現状を顧みれば (三浦・青木、2009; 坂本・西河、2002)、非表出性攻撃から抑うつが引き起こされるメカニズムを明らかにすることは、抑うつの治療及び予防にとって大きな意味があると考えられる。本研究では、これらの変数間の関係を明らかにすることを第一の目的とする。

また、Gross (1998) は感情調節には2種類あるとする感情過程モデル (process model of emotion) を提唱している。一方は感情反応が実行される前の段階における調節 (Antecedent-focused Emotion Regulation) であり、感情的インパクトが小さくなるように状況の解釈を変更する再評価 (reappraisal) が代表的である。他方は感情反応決定後の段階の調節 (Response-focused Emotion Regulation) であり、内的感情を外に表すことを禁止する抑制 (suppression)

が代表的である。感情表出の抑制は、主観的感情を低下させることができず、交感神経系の活動を活性化させたり、感情を刺激する出来事に関する記憶を損なう一方で、再評価はこれらを刺激したり、損なったりすることなく、否定的感情の表出と感情体験をともに減らすことができる (Gross, 1998 ; Gross & Levenson, 1993, 1997 ; Gross & John, 2003; Richards & Gross, 1999, 2000, 2006; Roberts, Levenson, & Gross, 2008)。このことは、どの種類の感情調節が行われるかも抑うつに影響を及ぼすことを示唆している。

本研究では、対人葛藤場面において、この 2 種類の感情調節を測定することを試みた。本研究で用いたような、相手の意図のあいまいな挑発場面では怒りが発生するが、これに対する感情反応が実行される前の段階における調節とは、その怒りの元になる相手の言動やその場面が自分に持つ意味についての認知を自己にとって脅威とならないように再構成することや、怒りがわいてこないように別のことに注意を向けることと仮定し、一方、抑制とは、いったん抱いた怒り表出しないために、感情表出行動を調節するものと仮定した。

具体的には、本研究では、改訂版社会的情報処理モデルの立場に立つ de Castro (2005) 及び、大学生 68 名を対象として行った予備調査の結果から、適応的感情調節として、認知的調節 (「こういう、ついていない日もあるものだ、と考える」)、積極的気晴らし (「好きなことや楽しいことをする」)、消極的気晴らし (「そのことを考えないようにする」) の 3 種類を測定したが、これらの感情調節は、認知的調節及び積極的気晴らしが、感情反応が実行される前の段階における調節であり、消極的気晴らしが感情反応決定後の段階の調節と仮定した。なぜならば、認知的調節は、怒り反応を生む状況に対する認知を変えることによって、怒りそのものが生じないようにしようとする調節であり、積極的気晴らしは、その事態から注意をそらすことによって怒りを生じなくしようとする調節である。一方、消極的気晴らしは、生じてしまった怒りを抑えることで、それを表出しないための方策であると考えられるからである。ここから、本研究で用いる感情調節においても、認知的調節及び積極的気晴らしが抑うつを抑え、消極的気晴らしが抑うつを高めるのではないかと予想される。用いられる感情調節の種類の違いが、抑うつなどの否定的感情に及ぼす影響を検討することが本研究の第二の目的である。

本研究における仮説は、以下の 2 点である。

- ① 対人葛藤場面での怒りの強さは、抑うつを促進する
- ② 感情調節のうち、認知的調節と積極的気晴らしは抑うつを抑え、消極的気晴らしは抑うつを促進する。

方法

1 対象者

大学生 206 名 (男性 94 名、女性 112 名、平均年齢 18.7 歳、*SD*0.9)

2 方法

授業時間に問題冊子を配布し、記入し終わった者から回収した。

3 測定変数

相澤 (2011) が使った 3 つの対人挑発場面を用い、de Castro (2005) の改訂版社会的情

報処理モデルの変数として、社会的情報処理変数及び感情変数を測定した。さらに、抑うつに関する不快感情変数として、落ち込み、不安、ゆううつを測定した。

対人挑発場面は、①主人公が見知らぬ男性に追突される（衝突）、②主人公が教室で読書をしているときに他の学生に灯りを消される（灯り）、③主人公がタクシーを呼び止めたのに無視される（タクシー）という3つの場面で、参加者には「実際にあなたにそのようなことが起こったと想像してください」と指示した。

加害者の意図の知覚：「どうしてその若い男性は、あなたにぶつかったのでしょうか（灯りを消したのでしょうか、無視したのでしょうか）。次のそれぞれが、それくらい当てはまると思いますか。」と聞き、敵意（「わざとぶつかった」）、偶然（「気づかなかった」）、あいまい（「自分の方が避けると思った」）3項目について「全くそう思わない（1点）」から「非常に強くそう思う（9点）」までの9段階尺度で回答させた。

加害者の感情：加害者が、怒り、ゆううつ、うれしさの3つの感情を、どれくらい強く感じていたと思うかを、「非常に弱く（1点）」から「非常に強く（9点）」までの9段階尺度で回答させた。

自己の感情：自分が主人公だったら怒り、ゆううつ、不安、恐怖の4つの感情を、どのくらい強く感じると思うかを、「非常に弱く（1点）」から「非常に強く（9点）」までの9段階尺度で回答させた。

感情の調節：de Castro（2005）と、日本の大学生68人に本研究と同じ場面設定でどのような行動をとるかを自由記述で尋ねた予備調査の結果を参考に、感情調節として、積極的気晴らし、消極的気晴らし、認知的調節の3種類を測定した。「そう感じた時に（対人挑発場面で、被験者が感じるであろうと先に言及した否定的感情のこと）、気分を良くしてくれるだろう何かを考えられますか？」という問いに対する回答について、積極的気晴らしとは、外部に気晴らしを探そうとしている場合に、消極的気晴らしとは、そのことを意識しないようにしている場合に、認知的とは、認知的な方略が示された場合を指す。なお、de Castro（2005）では、1つのカテゴリーであった気晴らしを積極的、消極的の2つに分けたのは、予備研究において、気晴らしには「不快なことを考えないようにする」といった消極的なものと「他に好きなことや楽しいことをする」といった積極的なものの二種類が見られたことを踏まえて、本研究では2種類に分けて測定した。

参加者には「自己の感情で回答したような気持ちになったとき、あなたは自分の気分を改善するために、次のことを、それぞれ、どのくらいすると思いますか」と尋ね、積極的気晴らしは「誰かに、あったことを話す」「好きなことや楽しいことをする」の2項目、受動的気晴らしは「そのことを考えないようにする」「そのことを忘れる」の2項目、認知的調節は「相手も急いでいたのだから、しょうがないと考える」「こういう、ついていない日もあるものだ、と考える」の2項目で測定した。これらの項目を場面ごとに、「まったくそうしない（1点）」から「必ずそうする（9点）」の9段階尺度で回答させた。

攻撃反応：「その男性を追いかけて、声をかけて振り向かせ、謝らせる。」という比較的弱い攻撃性を測る項目と、「その男性の肩をつかんで、振り向かせる」という比較的強い攻撃性を測る項目の2項目で攻撃行動を測定した。

これらの項目を場面ごとに、「まったくそうしない（1点）」から「必ずそうする（9

点)」の 9 段階尺度で回答させた。

抑うつ的感情：坂本・大野（2005）において、抑うつ気分を「減入った」すなわち「悲しくなった」「憂うつになった」「ふさぎ込んだ」「落ち込んだ」と定義していることを参考に、「落ち込み」「ゆううつ」の代表的な二つの抑うつ気分、抑うつと一緒にとらえられることの多い「不安」を加えた 3 つを測定した。

落ち込み、不安、ゆううつ の 3 つの感情について、「次のそれぞれの感情を、どのくらい強く、感じると思いますか。」と尋ね、「非常に弱く（1 点）」から「非常に強く（9 点）」までの 9 段階尺度で回答させた。

結果

1 記述統計及び変数間の相関

各変数の得点はすべて 3 場面の合計とした。これらの平均点と標準偏差を Table1 に示す。また、各変数間の相関係数を Table2 に示す。

ここで、攻撃行動 1 と攻撃行動 2 は有意な相関を示したので、この二つの変数を加算して、新たに攻撃行動尺度を作成した。また、ゆううつ尺度、不安尺度、落ち込み尺度の 3 つの抑うつ変数は有意な相関を示したので、加算して抑うつ得点とした。

Table1 各変数の記述統計

	平均値	標準偏差
敵意意図	14.26	4.49
相手の幸福感	7.29	4.12
自己の怒り	20.11	4.46
積極的気晴らし	36.95	9.57
消極的気晴らし	33.69	10.33
認知的調節	33.74	9.83
攻撃行動 1	8.79	5.90
攻撃行動 2	5.92	4.67
感情調節	104.38	19.49
ゆううつ	16.70	5.95
不安	11.29	6.13
落ち込み	14.13	6.21

Table2 各変数の相関

	1	2	3	4	5	6	7	8
1 敵意意図								
2 相手の幸福感	.13							
3 自己の怒り	.32**	-.03						
4 感情調節	-.19**	-.02	.08					
5 攻撃行動 1	.30**	.00	.43**	-.17*				
6 攻撃行動 2	.19**	.07	.23**	-.17*	.78**			
7 ゆうつ	.08	-.01	.27**	.26**	.00	-.03		
8 不安	.18*	.16*	.04	.13	.06	.10	.45**	
9 落ち込み	.06	.04	.19**	.28**	-.02	.00	.69**	.69**

** $p < .01$ * $p < .05$

2 男女差の検定

男女差の有無を検討するため、各変数について、平均値の差を検討したところ、積極的気晴らし、認知的調節、抑うつが女性の方が有意に高く、攻撃行動においては男性の方が有意に高いという男女差が見られた (Table3)。そこで、以下の分析は男女別に行うこととした。

3 重回帰分析

抑うつに及ぼす影響を確かめるため、これを従属変数とし、敵意意図、相手の幸福感、自己の怒り、消極的気晴らし、積極的気晴らし、認知的調節、攻撃行動を説明変数とする、ステップワイズ法の重回帰分析を男女別を実施した。その結果を Table4 及び Table5 に示す。ここから、男性では、積極的な気晴らしと認知的調節が抑うつを高めたが、女性では、相手の敵意及び幸福感を知覚するという敵意の帰属、怒り、認知的調節が抑うつを高めたことが示された。

Table3 男女差

	男性	女性	<i>t</i> (<i>df</i>)
敵意意図	14.81 (4.17)	13.80 (4.70)	1.61 (204)
相手の幸福感	7.48 (4.48)	7.13 (3.80)	.06 (204)
自己の怒り	20.07 (4.76)	20.14 (4.22)	-.11 (204)
積極的気晴らし	35.23 (9.87)	38.38 (9.10)	-.38* (204)
消極的気晴らし	32.68 (10.66)	34.54 (10.02)	-1.29 (204)
認知的調節	31.59 (10.53)	35.54 (8.84)	-2.93** (204)
攻撃行動	17.71 (11.79)	12.19 (7.33)	3.95** (149.86)
抑うつ	38.50 (15.43)	45.15 (15.45)	-3.08** (204)

** $p < .01$ * $p < .05$

Table4 抑うつを従属変数とした重回帰分析結果 (男性)

	β
積極気晴らし	.27**
認知調節	.23*
R^2	.12

** $p < .01$ * $p < .05$

Table5 抑うつを従属変数とした重回帰分析結果 (女性)

	β
相手の敵意	.21*
相手の幸福感	.19*
自己怒り	.38**
認知調節	.32**
R^2	.23

** $p < .01$ * $p < .05$

考察

1 男女差

本研究では、多くの変数に男女差が認められたため、仮説の検討は男女別に行っている。結果からは、女性の方が、積極的気晴らしと認知的調節という感情調節を用いる傾向が高く、攻撃行動をとる傾向は低く、抑うつが高いことが示された。ここから、女性は、男性に比べて、怒りを感じても、それを感情調節によって処理する傾向が高く、攻撃行動を行わないことが分かる。これは、一般に適応的な傾向と評価されるが、同時に、こうして怒りを表現しない傾向が強い女性は抑うつ傾向が男性に比べて高い。ここから、攻撃行動という問題行動を抑制することは、怒り感情の適切な処理を伴わなければ、抑うつという新たな不適応を引き起こす危険性があることが示される。

2 怒りの強さと抑うつ

仮説 1 は、部分的にのみ支持された。すなわち、女性において、怒りの強い者は、抑うつが高いことが示された。一方、男性においては、抑うつに、怒りの強さは関係しなかった。この結果は、大淵（1987）において、女性の方が男性よりも、怒りの出来事の後で抑うつを残す傾向が見られ、また怒りや攻撃行動は女性にとってストレスのある経験で満足のゆく対応もとりにくいという指摘や、宮下・森崎（2004）の、友人間での対人感情喚起場面で、男性は怒り表出を抑える者の方が精神的に健康であるが、女性にはそうした傾向は見られないという先行研究における指摘と共通するものである。

本研究において、男女において、怒りの強さには有意差がなかったこと、消極的気晴らしを除く他の感情調節は女性の方が有意に高かったこと、さらに、実際に攻撃行動を実行するかどうか抑うつには影響を与えないことを踏まえると、この結果は、女性は男性に比べると、怒りを感じることで自体によって抑うつが高まりやすいことを示している。これには、調査協力者が抱いている周囲から評価される女性像が影響しているなど、社会的・文化的な影響があることが推測されるが、それを明らかにするためには、さらなる研究が必要である。

3 感情調節と抑うつ

仮説 2 は、支持されなかった。仮説 2 に反して男女ともに、認知的調節が抑うつを高めることが示された。また、男性では、積極的気晴らしが抑うつを高めていた。これは、先行研究の結果とは異なっている。その理由としては、以下の 2 つの可能性が考えられる。

第一に、今回の調査の質問項目の順序が、調査参加者に、怒りの程度を評定させた後、それぞれの感情調節をどの程度行うか尋ねるものであったことが影響している可能性がある。つまり、Gross と John（2003）が述べるように、多くの感情反応の可能性の中から、一つの感情反応傾向が選択された後に行われる感情調節である抑制は、否定的感情の表出行動を抑制することに焦点を置くために、否定的感情は未解決のまま持続し内にため込まれることになる。ここから、たとえ、その方略が認知的なものであっても、感情反応が選択された後に、行動を抑えるために感情調節が用いられると、否定的感情そのものを低減させないのではないかと考えられる。さらに、認知的調節が最も抑うつを高める効果があるという結果からは、いったん感情反応傾向が定まった後に行動を抑制する際は、認知的な操作で感情を抑え込もうとする方が、

より否定的感情を強める可能性が示唆されている。

第二に、本研究で扱われたような、他者から危害を加えられたと感じた時に抱くような反応的な怒りの感情調節は、これまでの感情過程モデル（例えば、Gross, 1998）で扱われてきた不快感情に対するそれと異なる性質を示すのではないかという可能性である。彼らが用いた不快感情喚起のための刺激は、「否定的感情を感じないようにしたいとき、その状況のとらえ方を変える。」といった内容の不快感情の具体的な中身を特定しない内容の質問紙（Gross & John, 2003）、不快感を引き起こすような医学的処置の映像（Gross & Levenson, 1993）、夫に浮気を告白される妻を映した映像やひどい怪我を負ったばかりの男性の写真（Richards & Gross, 2000）、特定の感情を引き起こすような映画（Ehring, Tuschen-Caffier, Schnulle, Fisher, & Gross, 2010）などであり、自分自身が危害を受けたと感じて反応的に怒りを感じるようなものとは異なる。そこから、自らに危害を加えられると感じた際に抱く怒りのような衝動性が高い感情を、認知的な操作によって抑えようとすることは大きなストレスを伴うという可能性が示唆される。

いずれの可能性も、一般には適応的に望ましい感情調節とされる認知的な調節であっても、条件によっては抑うつを高める可能性があることを示しており、攻撃行動への適切な心理教育的介入という観点から、今後、より詳細に検討していく必要がある。

今後の課題

本研究は、攻撃性の社会的情報処理モデルを、非表出性攻撃と抑うつとの関係に適用することを試みたものである。

本研究では、一斉調査により、場面想定法を用いて、調査協力者の自己評価により感情や認知を測定している。今後は、実際場面に近い状況での仮説検討という意味から、より焦点を絞った実験的手法により、現実の場面に近い条件下での反応を検討していく必要がある。

また、本研究では、男女差などを通じて、文化的な影響も示唆されたが、これを踏まえて、異なる文化間での結果の違いを検討するため、国際比較を行うことも、問題を明らかにしていくために有効であると考えられる。

[注]

- 1 山崎ら（坂井・山崎、2003、2004a、2004b）は、この *inexpressive aggression* を表出性攻撃（*expressive aggression*）と対比させる形で、「不表出性攻撃」と呼んでいるが、日本語表現の自然さを考えて、本稿では、「非表出性攻撃」と呼ぶことにする。

参考文献

- アリストテレス 山本光雄訳 1961 政治学 岩波文庫
Barbour, K.A., Eckhardt, C. L., Davison, G. C., & Kassirer, H. 1998 The experience and expression of anger in martially violent and martially discordant –nonviolent men. *Behavior Therapy*, 29, 173-191.
Berkowitz, L. 1993. *Aggression: Its causes, consequences, and control*. New York: McGraw-Hill.

- Bettencourt, B.A., Talley, A., Benjamin, A.J., & Valentine, J. 2006. Personality and aggressive Behavior under provoking and neutral conditions: A meta-analytic review. *Psychological Bulletin*, 132, 752-777.
- Cole, P. M., Martin, S. E., & Dennis, T. A. 2004 Emotion regulation as a scientific construct: Methodological challenges and directions for child development research. *Child Development*, 75, 317-333.
- Crick, N. R., & Dodge, K. A. 1996. Social Information-Processing Mechanisms in Reactive and Proactive Aggression., *Child Development.*, 67, 993-1002.
- de Castro, B. O., 2010. Rage, Revenge, and Precious Pride. In Arsenio, W. F & Lemerise, E. A. (Eds) *Emotion, Aggression, and Morality in Children.* (pp.53-74). American Psychological Association, Washington, DC.
- de Castro, B. O., Merk, W., Koops, W. 2005. Emotions in Social Information Processing and Their Relations With Reactive and Proactive Aggression in Referred Aggressive Boys. *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology* Vol.34, No.1, 105-116
- Dodge, K. A. 2010. Social information processing patterns as mediators of the interaction between genetic factors and life experiences in the development of aggressive behavior. In Phillip R. Shaver & Mario Mikulincer (Eds.) *Human aggression and violence: Causes, manifestations, and consequences.* Herzilya series on personality and social psychology. Amer Psychological Assn.
- Dodge, K. A., & Coie, J. D. 1987 Social-Information-processing factors in reactive and proactive aggression in children's peer groups. *J. of Personality and Social Psychology*, 66, 710-722.
- Eisenberg, N., Fabes R. A., Guthrie I. K., Murphy, B. C., Maszk, P., Holmgren, R., et al. 1996. The relations of regulation and emotionality to problem behavior in elementary school children. *Development and Psychopathology*, 8, 141-162.
- Ehring, T., Tuschen-Caffier, B., Schnulle, J., & Gross, J. 2010. Emotion Regulation and Vulnerability to Depression: Spontaneous Versus Instructed Use of Emotion Suppression and Reappraisal. *Emotion*. Vol.10, No.4, 563-572.
- Graham, S., Hudley, C., & Williams, E. 1992. Attributional and emotional determinants of aggression among African-American and Latino young adolescents. *Developmental Psychology*, 28 731-740.
- Gross, J. J. 1998. Antecedent- and Response-Focused Emotion Regulation: Divergent Consequences for Experience, Expression, and physiology. *Journal of personality and Psychology*, Vol.74, No.1, 224-237.
- Gross, J. & John, O., P. 2003. Individual Differences in Two Emotion Regulation Processes: Implications for Affect, Relationships, and Well-Being. *J. of Personality and Social Psychology*. Vol.85, No.2, 348-362.
- Gross, J. J. & Levenson, R., W. 1993. Emotional Suppression: Physiology, Self-Report, and Expressive Behavior. *J. of Personality and Social Psychology*, Vol.64, No.6, 970-986.
- Gross, J. J. & Levenson, R., W. 1997. Hiding Feelings: The Acute Effects of Inhibiting Negative and Positive Emotion. *Emotional. Journal. of Abnormal Psychology*, Vol.106, No.1, 95-103.
- Gross, J. J., Richards, J. & John, O. P. 2006 Emotion regulation in everyday life. In D. A. Snyder, J. A. Simpson, & J. N. Hughes (Eds), *Emotion regulation in families: Pathways to dysfunction and health* (pp.13-35). Washington, DC: American Psychological Association.
- 橋本剛 1995 ストレッサーとしての対人葛藤－ストレス提言方略への展望－ *実験社会心理学研究* Vol.35, No.3, 185-193.
- Huston, B. K., & Vavak, C. R. 1991 Cynical hostility: Developmental factors, Psychosocial correlates, and health behaviors. *Health Psychology*, 10, 9-17.
- 勝間理沙・山崎勝之 2007 児童における 3 タイプの攻撃性が正負感情に及ぼす影響 *パーソナリティ研究* 第 16 巻第 1 号、47-55
- Lemerise, E. A., & Arsenio, W. F. 2000 An integrated model of emotion processes and cognition in social information processing. *Child Development*, 71, 107-118.
- Lockhman, J. E., & Wells, K. C. 2002 Contextual social-cognitive mediators and child outcome: A test of the theoretical model in the Coping Power program. *Development and Psychopathology*, 14, 945-67.
- 三浦理恵・青木邦男 2009 大学生の精神的健康に関連する要因の文献的研究 *山口県立大学学術情報* 2、175-183
- 宮下敏恵・森崎竜亮 2004 怒り感情の表出制御と精神的健康及び対人不安との関係 *上越教育大学研究紀要* 第 23 巻第 2 号、488-499
- Nomellini, S., & Katz, R.C. 1983 Effects of anger control training on abusive parents. *Cognitive Therapy and Research*, 7, 57-67

- 越智萌子・金澤潤一郎・坂野雄二 2012 大学生を対象としたストレスと怒りが抑うつに与える影響 日本行動療法学会大会発表論文集 (38)、292-293
- 大淵憲一 1987 成人の怒りの経験における男女差 大阪教育大学紀要 第IV部門、第36巻、第1号、25-32
- 大淵憲一 1996 攻撃性と対人葛藤 大淵憲一・堀毛一也(編) パーソナリティと対人行動 誠信書房 pp.101-122
- 大淵憲一 2000 攻撃と暴力 なぜ人は傷つけるのか 丸善ライブラリー
- 大淵憲一 2011 新版 人を傷つける心 攻撃性の社会心理学 サイエンス社
- Richards, J. & Gross, J. 2000 Emotion Regulation and Memory: The Cognitive Costs of Keeping One's Cool. *J. of personality and Social Psychology*. Vol.79, No.3, 410-424.
- Roberts, N. A., Levenson, R. W., & Gross, J. J. 2008 Cardiovascular Costs of Emotion Suppression Cross Ethnic Lines. *International Journal of psychophysiology*, 70 (1), 82-87.
- 坂井明子・山崎勝之 2003 小学生における3タイプの攻撃性が抑うつと学校生活享受感情に及ぼす影響 学校保健研究、45、65-75
- 坂井明子・山崎勝之 2004a 小学校における3タイプの攻撃性が攻撃反応の評価および結果予測に及ぼす影響 教育心理学研究、52、298-309
- 坂井明子・山崎勝之 2004b 小学生用P-R攻撃性質問紙の作成と信頼性、妥当性の検討 心理学研究、75、254-261
- 坂本真士・西河正行 2002 大学生における抑うつ気分のコントロールに関する予防的取組：グループワークを利用した心理教育プログラムの開発 人間関係学研究：社会学社会心理学人間福祉学：大妻女子大学人間関係学部紀要3、220-242
- 寺坂明子 2011 児童期・思春期における怒りの多次元の特徴 発達心理学研究第22巻第3号、298-307
- 上野真弓・丹野義彦・石垣琢磨 2009 大学生の持つ抑うつ傾向と攻撃性の関係－攻撃性の4つの下位尺度を踏まえて、パーソナリティ研究18(1)、71-73
- 山内剛・坂野雄二 2006 日本行動療法学会他界発表論文集(32)、166-167

正 誤 表

共同執筆者名に誤記がございましたので、お詫びして下記の通り訂正いたします。

『尚綱学院大学 紀要 第68号』

頁	誤	正
目次	7. 大学生における非表出性 攻撃と抑うつの関係について －社会的情報処理モデルの 立場から－ 川端 壮康・大淵 <u>健一</u>	7. 大学生における非表出性 攻撃と抑うつの関係について －社会的情報処理モデルの 立場から－ 川端 壮康・大淵 <u>憲一</u>
P91論文執筆者名	川端 壮康・大淵 <u>健一</u>	川端 壮康・大淵 <u>憲一</u>
巻末 執筆者紹介 下から5段目	大淵 <u>健一</u>	大淵 <u>憲一</u>